



花には、どうしていろいろな色がついているの

花は、花粉を運んでもらうために目立つ色をしている

花は、子孫をふやすためには、同じ種類のほかの花のおしべの花粉を、めしべに運んでもらわなければなりません。スギやトウモロコシ、コムギなどの花粉は、風が運んでくれます。これらの花は、地味で目立ちません。でも、たいていの花は、チョウやハチなどの昆虫や、鳥などに、花粉を運んでもらっています。そのためには、あまいみつがある場所や、花が目立たなければなりません。よく目立つ色の花をもつ植物が、競争に勝って生きのびてきたといえます。

花の色は、おもに、赤や青、むらさき色のもとになるアントシアニン（アントシアンの仲間）、黄色からだいたい色になるカロチノイド、白い色のもとであるフラボノイドという、三色の色素の組み合わせでできています。ツククサ、赤や青のアサガオ、アジサイなどはアントシアニン、タンポポ、ヒマワリ、ヘチマ、キンセンカなどはカロチノイド、ユリ、コスモス、チューリップ、キンギョソウなどの白い花には、フラボノイドが入っています。

昆虫は、紫外線で色を見ている

赤い色や黄色や青色は、ミツバチやたいていの昆虫には、見分けられません。チョウや鳥たちは、はっきり見分けます。また、人間の目には白い花に見えるフラボノイドは、紫外線を吸収する性質があります。最近、ケシの赤い花が、紫外線を反射していることがわかってきました。ミツバチなどの昆虫は、紫外線で色を見ることのできるものが多いため、目立たない白い花が、人間の目に見えるのとはちがう目立つ色で、見分けられているらしいことがわかってきています。（監修・矢野 亮）

